

小川正恭先生のご逝去を悼む —研究業績を回想しつつ—

Offering my Condolences for the Loss of Professor Masayasu Ogawa :
Remembering his Research Achievements

渡 邊 欣 雄*

Yoshio Watanabe*

要約

小川正恭先生は2022年暮れ、音沙汰もなく亡くなられた。ご自身の専門分野である社会人類学界をリードされてきた人物だけに、われわれの思い出は彼の生涯にわたる研究業績に集約できる。したがって彼の学部時代の学習経験から、大学院進学、大学院在籍中の留学、そして武蔵大学専任教員時代に至るまでの彼の研究業績を紹介しつつ、研究活動の特徴を中心に紹介したい。それは第一に、社会人類学界における学界への影響の大きかった彼の親族研究であり、第二に、社会人類学界に必要な名著の数々の翻訳だった。そのような研究活動の影響や評価からか、日本民族学会（のちの日本文化人類学会）の役員経験や、武蔵大学での2度にわたる学部長就任などとなった。小川先生とは、過去の研究活動を振り返り、以前同様の面談を果たしたかった所以である。

1. 小川正恭先生の訃報

小川正恭先生が亡くなられた!!

このことを電子メールで、小川正恭先生の元学生から知らされた。彼とは、別れてから何年面談を果たしたことがなかったろうか? 2012年3月に行われた小川教授の武蔵大学での最終講義にも、わたしは海外出張のため出席できず、その後、幾度がお会いする機会があったにもかかわらず、

*東京都立大学名誉教授

わたし及び小川先生の都合で数々の集まりに出られず、結局、お会いすることができなかった。

ただ小川先生とは知り合ってから近年までずっと年賀状をやりとりしており、年一度の機会が相互の近況を知るいちばん良い機会になっていた。しかし、それも数年前に彼から年賀状の挨拶を断念するとの連絡があり、それ以後まったくの音信不通になっていた。

そんなおり、2021年春だったと思う。突然、小川先生から電話があり、コロナ禍のお互いの近況を語りながら、「日本文化人類学会を辞めるには・・・」などという話に及んでいた。わたしはずっと、この学会の会員でいたい希望だったので、彼の、その退会の意志には驚いたが、そのとき何か彼の私的に重要な理由がありはしまいかと憶測はしていたのである。

そこに逝去に至る背景があったかどうかは、いまは知るよしもない。ご逝去の報に接して、ほんとうに悔しい思いだが、衷心ご冥福をお祈りするとともに、脳裏には、かつての彼との思い出の映像の断片をつなぎ合わせるかたちで、続々と甦ってくるものがあった。本稿は、わたしが抱く彼の研究活動の貴重な思い出である。

2. 小川正恭先生の学部生・大学院生時代の研究活動

わたしが東京都立大学大学院の社会科学研究所社会人類学専攻に進学したのは、1969年4月のことだった。わたしは学部時代(埼玉大学教養学部)から文化人類学を主専攻として学習してきたので、大学院に進むとしたなら東京都立大学大学院社会人類学専攻は、文系の大学院としては最も創立年代が古く、かつ著名な憧れの大学院だと思っていた。わたしが学部時代に行っていた研究も、コミュニティ・スタディや親族研究だった。まさに「社会」人類学というにふさわしい研究だったと思われる。

大学院に進学はしたが、当時は世にいう「大学紛争」の時代で、進学した初年度は、われわれ院生が原因で授業は中止となり、結局、あまり行わ

れることはなかった。と同時に小川先生との関係で言えば、彼は当時アメリカ合衆国のピッツバーグ大学に留学中で（1968～1971年）、大学院でお会いすることはなかった。

お会いできたのは留学先から彼が日本に戻られて以降だが、面識をもって飛躍的な学术交流や友人関係が深まったのは、「親族研究」という当時の社会人類学研究における流行や必要性を共有できたからである。したがって、在りし日の彼の就職前の盛んな研究活動を紹介しながら、当時の社会人類学界における彼の研究活動の学術的意義について考えたいわけである。

さて小川先生は、公開されている履歴でみるように1942年東京都中野区生まれ（小川 2020）。そして1960年には、当時目黒区にあった東京都立大学人文学部に入学することになる¹⁾。やがて選んで進むことのできた社会学科に学籍を置くことになるわけだが、この選択が彼の一生を特色づけたかと思うと、たいへんうらやましく思えてならない。この大学の社会学科というのは、社会学と社会人類学によって特色づけられた学科で、彼の最終講義の題名もまた「社会学のなかの人類学」だったことを思い出せばよい²⁾。

この武蔵大学もまた、1969年、人文学部の創設と同時に社会学科が創設され、そしてやがて独立した社会学部創設につながった。社会学科創設時の理念もまた「理論系（社会学）、産業社会学系、社会人類学系という3本の支柱を立てて」創られていた（武蔵大学人文学部 1980:74）。逆に言えば武蔵大学の社会学科は、社会学を熟知した社会人類学者という人材を求めていたのかもしれない。

さて彼の略歴の話にもどるが、1964年学部を卒業して、すぐさまその年、東京都立大学の大学院に進学することになる。進学したのは社会科学研究所社会人類学専攻だった。当時、学部としては社会学も必修科目で、とうぜん彼は社会学も学習していたわけだが、学部時代により興味を持ったのは社会人類学のほうだったようである。

当時の社会人類学専攻の教員は古野清人教授(1960~1963年)、馬淵東一教授(1953~1972年)、鈴木二郎助教授(1952~1980年)、村武精一助教授(1963~1989年)で、やがて石川榮吉教授(1972~1988年)が就かれた時代になっていった。いずれの教員も当時の用語でいう「未開社会」の研究者だった。したがって受講した講義の対象社会は、村武助教授のゼミや講義を例にすると、フィリピンやボルネオほかアフリカなどに及んでいた。例外は沖縄や日本本土社会の講義だったが、むろん社会学とは視点や対象だけでなく理論が異なっていた。主として学部時代には J.D.Freeman の“The Family System of the Iban of Borneo”や、G.P.Murdock の *Social Structure*, あるいは D.M.Schneider の“Some Muddles in the Models” *ASA Monograph Vol.1* などを、ゼミや講義を通じて読んでいたと自分の過去を語っている(小川 1998:558~559)。

このような学部時代の学習経験が、やがて大学院以降の彼の特徴的な研究活動に結びついていく。彼が進学した 1960 年代の東京都立大学大学院は、すでに述べたように「親族研究」の全盛期だった。いや別に東京都立大学大学院に限らず、社会人類学研究であれば親族研究が大流行の時代だった。彼は大学院に進学したその 1964 年に、この大学院の研究会で「母系バンツー族における家族構造の類型」というタイトルで研究発表を行っている(小川 1964:34~37)。以後、この社会人類学専攻の研究活動で論文投稿、研究発表、書評を何度も行っているが、ほぼ親族研究の成果によっていることが、院生による組織である社会人類学研究会の記録でわかる(小川 1965,1967a,1971a,1972a,1974)³⁾。1967 年に提出した修士論文もまた『E. R. Leach と構造主義—親族の理論をめぐって—』という、当時、非常に注目すべきイギリス社会人類学者の親族理論と構造主義について論じた内容だった⁴⁾。

この大学には院生の運営による雑誌『東京都立大学社会人類学研究会報』だけでなく、1967 年から、とくに村武精一教授を中心に運営されていた『社』という研究誌もあり、そこにも彼は積極的に投稿を繰り返して

いた。内容は、やはり当時の親族研究を中心に理論の紹介や書評・論評であり、徐々に関連学会の牽引役にもなりつつあった（小川 1967b, 1971b, 1972b）。

さらに研究室の機関誌『社』の発行と併行して、1975年、学会誌『東京都立大学社会人類学年報』が発刊された。この学会誌は従来の院生の運営による『東京都立大学研究会報』を非会員にも拡大して投稿できる研究誌とし、同時に小規模だった院生だけの研究会を広く開放して学会化するという事業の一環だった。その創刊号にも彼は積極的に投稿しており（小川 1975）、その論文もまた親族研究を発展させる刺激的な内容だった。

これほど、ほぼ毎年のごとく社会人類学における親族研究の成果を公表しながら、1968年から1971年までピッツバーグ大学に留学する機会に恵まれたわけである。この留学経験こそが、おそらくは社会人類学界における「海外研究翻訳の第一人者＝小川正恭」というゆるぎない地位を築いた契機になったのではないかと想像している。

3. 専任教員としての小川正恭先生の研究活動

1974年、彼は東京都立大学大学院博士課程を修了。すぐさまこの東京都立大学社会人類学教室の助手に採用された。そして1976年まで、この教室＝専攻の助手として活躍した。武蔵大学との関連で言えば1975年から1976年まで人文学部社会学科の非常勤講師として、学部生に「比較社会学」の講義を行っている（武蔵大学人文学部 1980:109）。

わたしが彼に親しく指導を受け、さまざまな影響を受けたのは、おそらく彼の助手時代ではなかったかと思う。彼は1971年にピッツバーグ大学から帰国していたとはいえ、この年はわたしが修論作成・執筆の時期であり大学には行っておらず、1972年に博士課程に進学しても、今度は沖繩にたびたび調査出張しており、あまりお会いする機会がなかったからである。

社会人類学界は何度も言いたいが、当時は親族研究の全盛時代だった。しかし親族研究を行うにしても日本語で書かれた社会人類学の文献はわずかで、和文の文献に頼るだけではとうてい親族研究はできなかった。逆に彼はとくに英語文献に精通しており、研究会での彼の発表を聴くたびに新たに読まねばならぬ文献がわかるほどだった。こうした彼の紹介した英語文献に親しむうちに、われわれ後進の者たちも世界的な親族研究に接して議論できるようになっていった。

そんな時期に彼は前任者だった松園万亀雄先生の後任として、1976年から武蔵大学人文学部社会学科の専任講師に就くことになる。1976年から1978年まで専任講師、1978年から1980年まで助教授、そして1980年から教授に昇格している。彼が教授に昇格したその年に、わたしが同じ学科の助教授として着任することになる。

武蔵大学の専任教員になって以来、彼は著しい研究活動の特徴を世に示すことになる。それこそがすでに触れたように、「海外研究翻訳の第一人者=小川正恭」という名声だった。

では小川先生が単訳者もしくは共訳者になり、当時の社会人類学界で必読文献とした書籍を出版年順に列記して、その出版の意義を若干紹介してみたいと思う。

① E.R. サーヴィス著 [松園万亀雄・小川正恭共訳 1977『文化進化論—理論と応用—』]

わたしは1960年代に学部生として文化人類学を習ったので、1950~60年代の社会人類学・文化人類学界は、一方で親族研究の全盛期であったと同時に新進化主義の時代でもあって、こうした理論の動向をみなみな注視していたことを知っている。進化主義とは人類の発生まで視野に入れた、歴史学とは異なる長大な人類史を復元する目的と対象や理論を特徴とした人類学で、文化人類学発祥の時代、すなわち19世紀の単線的人類進化史の考え方とは異なる理論に裏打ちされたものだった。その単線的進化主義が否定されて戦後さらに出現した新たな進化主義が、彼の共訳した代表的

な「新」進化主義理論の書籍だった。数ある新進化主義の主張のなかで翻訳された E.R. サーヴィスの理論は新進化主義の中庸を説くもので、日本でも多くの読者を呼んだと思われる。

- ② W.H.R. リヴァーズ著 [小川正恭訳 1978 『親族と社会組織』(人類学ゼミナール7巻)]。

彼らしいと思われる好書の翻訳が、リヴァーズの、この親族理論の書である。リヴァーズ以前の社会人類学における親族理論というのは、あまり体系的ではなかった。つまりリヴァーズ以前の親族理論は、人類の野蛮から文明に至るヨーロッパ・オリエンタリズムによる非西欧社会への差別と偏見からなる進化論だった。つまりは母権制、あるいは母系制から父権制・父系制へという発展論か、こうした親族体系を類型化して個別民族に父系制・母系制などを押しつけ=割り当てて西欧文明を美化しようとするものだった。リヴァーズがオリエンタリズムを脱却したかといえは誤解になるが、少なくとも彼の親族理論は後世において議論される用語の類型化の基礎を築いたと、わたしは評価している。そんな親族研究において画期的な研究成果を、彼によって日本で一般化および大衆化できたのだった。

- ③ クロード・レヴィ=ストロース著 [馬淵東一・田島節夫監訳・花崎 皐平・鍵屋明子・小川正恭ほか共訳 1981『親族の基本構造』上巻, 1982 同下巻]

社会人類学界に新しい理論や視点をもたらした名著の翻訳。社会人類学において「構造」や「社会構造」という概念は、レヴィ=ストロースの提唱以前から用いられていた。しかし以前の「構造」概念とは違って、レヴィ=ストロースの構造は言語学の概念を社会に適用すべく考案された概念で、いわば社会のシンタクス(統語法)を求めるものだった。すなわち、たとえば個別社会の親族システムの一つである婚姻は、それぞれの婚姻当事者が属する親族集団間の契約なのだが、彼ら婚姻当事者や親族集団の意識のなかにあるルール、一夫一婦制か一夫多妻制かなど、父処婚か母処婚かなど、婚資の有無などのルールではなく、個別社会を超えた背後に

ある当事者たちの意識外に存在する契約と人・モノ交換のルールを見いだし類型化した試みだった。これを縁組論 (alliance theory) という。構造主義は翻訳された当時、社会人類学のみならず多くの学術分野に深い影響を与えて、こんにちも生き続けている理論である。だから翻訳者の貢献は大きいと言わざるをえない。

④ 村武精一編 [小川正恭ほか共訳 1981『家族と親族』]

レヴィ=ストロース著の翻訳は上下2巻に及んでおり、分担された翻訳作業だったとはいえ原著は分厚くかつ用語は難解で、たいへんな翻訳作業だったと思われるが、それとほぼ同時並行して編訳本が刊行されている。彼はJ.D. フリーマンの「キンドレッドの概念について」の1章を訳したにすぎないが、本書は当時の海外の親族研究の最新の論文を集めて翻訳されたものだっただけに、画期的な書だった。彼が訳したフリーマンのキンドレッド (親類) 理論は、彼の院生時代にすでに読破していた理論だったし、ほかの親類理論とは異なる内容を載せていた。後々に社会人類学界で議論される双系 (bilateral) 親族論、あるいは共系 (cognatic) 親族論に多大な影響を及ぼした理論だった。

⑤ ロジャー・M・キージング著 [小川正恭・笠原政治・河合利光共訳 1982『親族集団と社会構造』]

同様の驚きは、やはり④と同様に、ほぼ同じ時期に出版されている翻訳書だということ。しかし本書は④のような論集ではなく、いわば当時の親族研究の教科書とも言うべき好書で、内容を大別すれば「進化史上の人類の親族」、「出自と親族」、「父系・母系出自集団の特徴」、「縁組論」、「双系親族関係の特徴」、「親族名称」、「親族と社会関係」、「社会構造の進化と適応」からなる概説だった。彼の翻訳分担で意外なのは、本書の序章と親族と進化との関係や、親族関係以外の社会関係について論じている章を翻訳担当していることである。こうした親族関係とは関連を持ちつつも、広く親族関係以外の社会関係や政治・宗教について扱った彼の論文は、親族研究関連の論文に比べると少ないが、院生時代から後年に至るまで対象とし

ていたことで理解できる (小川 1972a,1972c,1990,1995 など)。

⑥ 小川正恭・渡邊欣雄・小松和彦編 1988『社会人類学の可能性 (2) 象徴と権力』

彼の残した、学術上の唯一の編集本といえるのではないかと思うのが本書である。本書は、東京都立大学の石川榮吉先生の退職を記念して編まれた2冊のうちの1冊である。退職された石川榮吉教授の研究に合わせたテーマを掲げて、諸民族の世界観、社会関係における自己と他者のあり方、文化に秘めた権力などについて、教え子たちが論文を載せた論集である。石川榮吉教授は彼が博士課程の時期に東京都立大学に着任されていたので、彼自身は院生としてではなく当時の助手として編集者に加わった。それだけにこの本を編集はしたが、論文は載せていない。

こうして彼の研究の足跡を紹介してみると、彼は比類なき海外書籍の読書家であり翻訳者であり、紹介・分析者だったことがわかる。言い換えるなら、ほかの社会人類学者の特徴になっているフィールドワーカーとしての特徴は、これまでここに紹介してきた彼の論文や単行本にはほとんどないことがわかろうかと思う。

4. 武蔵大学の同僚教員として、そしてその後も・・・

わたしは1980年から1988年の8年間、武蔵大学の教員として、小川先生と同様に「社会人類学」あるいは「比較社会学」を講じてきた。武蔵大学はゼミ教育中心の大学として教員と学生との距離がなく、また教員間の関係も色濃い面識関係によって親密だった。

このような特徴ある大学に勤めて翌年の1981年、わたしは台湾で交通事故に遭ってしまい、また小川先生は機を得てニュージーランドのオークランド大学に研修に旅立ってしまった⁵⁾。武蔵大学に社会人類学の専任教員が、教壇に立っていないという一年があったわけである。そんな危機を乗り越えて、この面識関係豊かな武蔵大学には学生たちによる社会人類学

研究会の活動がすでにあり、学内で社会人類学や隣接学問である民俗学について互いに議論し合う場があった。

そしてわたしは自分の社会人類学調査のため、たびたび沖縄に赴いていたが、1982年だったと思う。現地沖縄県東村の要請により、村史編纂のため長期調査をする機会に恵まれた。それを機会に、当時の学生たちをも調査に参加してもらい、なんと69日間も現地に宿泊して共同調査を行ったのである。いまでも印象に残っているのは、このとき小川先生も全期間ではなかったが、この共同調査に参加されていたことである。その後、彼の指導で茅ヶ崎市や平塚市ほかの調査に学生を参加させて、学外教育の一環としていた時期もあった。社会人類学の大学教育は単に「ゼミの武蔵」だけでなく、「フィールドワークの武蔵」という特色をも築けたのではなかろうか。わたし自身の経験で言えば、武蔵大学での学生を巻き込んだの調査ほど、以後、日数も回数も多い共同調査を経験しなかったのである。

武蔵大学在職当時、外に向けての研究活動も盛んに行ってきた。まずは1986年の比較家族史学会の武蔵大学における開催だった。当時、社会人類学のなかでも親族研究の拠点校があった。それこそ武蔵大学であり、「性と婚姻」という共通テーマのもと、わたしが実行委員長となり、家族研究の諸分野の研究者を集めて第10回目の研究大会を開催した。またその翌年の1987年には、隣接分野である日本民俗学(武蔵大学での科目名は日本民俗史)の宮本袈裟雄先生が年会実行委員長となり、小川先生とわたしも実行委員に加わって、第39回日本民俗学会年会を武蔵大学にて実施した。宮本袈裟雄先生は1985年から福田アジオ先生の後任として、武蔵大学日本文化学科に赴任していた。社会人類学と日本民俗学は武蔵大学では学科こそ異なっていたが、隣接分野として研究交流の長い歴史があった。

そのほか特筆すべきなのは、小川先生が武蔵大学在職中、人文学部の学部長(1993~1995年)と社会学部の学部長(1998~2000年)の2つの学部長を経験されたことである。こんな例はほかにないのではなかろうか。学部の異なる大学運営の苦労は尋常ではなかったと思われる。また日本民

族学会（のちの日本文化人類学会）の理事・評議員も経験されて、ときの学会運営を担当されたことも記憶に残すべきである。

1988年、わたしは武蔵大学を去って東京都立大学に赴任してしまった。その後、別にわたしが武蔵大学を去ったからではないが、小川先生の研究内容にいささか変化があったのではないかとわれてならない。

第一に、彼自身、親族研究は依然として続けておられたが（小川 2012 など）、社会人類学 = 文化人類学界での親族研究の位置づけが世界的な変化を遂げていて、海外の動向を見ると親族研究は消滅したかのような記述が出てきていた。では日本ではそんな状況になっていたかどうか、彼はみずから日本の教科書内容を中心に分析してみたのである（小川 2008 など）。海外では「親族」概念そのものが生物学的な前提によって成り立つ、研究者側（とくに西欧）の論理に裏打ちされた概念だったが、対象とする諸民族には同様の考え方、すなわち「血縁」や「婚姻契約」という関係で社会が成り立っていたわけではなく、したがって「親族」概念に普遍性はないとする理論が登場していた。ただ彼が分析対象としたのは「日本の社会人類学の教科書」であり、当時は海外のような理論や姿勢で記述されている教科書はなかったと、彼は結論づけている。

また親族研究の衰退と思われる 20 世紀晩期から 21 世紀初頭にかけて、彼自身が従来あまり試みなかった、フィールドワークの成果による研究を出すようになっていた。それは主として台湾の先住民についてであり、とりわけ自身が調査したツォウ族に関してであった（小川 1990, 1995, 2009, 小川・黄・松岡 2012 など）。

親族研究は問題多き時代になり、彼の意志に反して消滅ではなく衰退して、こんにちに至っている。しかし小川先生がかつて日本で社会人類学を担い、日本の諸業績を高見から評価するほどの人物だったことに変わりはない（中根・松園・小川 1986）。2020 年から顕著になったコロナ禍の流行がなければ、日本の、いや世界の社会人類学の来し方・行く末について小川先生の口からお聞きし、いまの学界状況について語り合いたかった。

いまは小川先生の大きな足跡に深く感謝し、手を合わせるだけである。

注

- 1) さまざまな彼の訳書の奥付けに略歴が載っている (Rivers 1968 [小川訳 1978] など)。
- 2) 「武蔵大学同窓会・しらさじ Web」の「平成 23 年度 (2012 年)」の「小川正恭教授最終講義」記事による。
- 3) この 9 輯の序文で、彼自身「主な関心は何かと聞かれて、親族の問題であると私は答えることが多い」と述べている。
- 4) 東京都立大学社会人類学研究会編『東京都立大学社会人類学研究会報』第 10 輯 (1975 年度) 5 頁に記載の表による。
- 5) オークランド大学での研修でどんな研究を進めていたか、彼自身の報告がある (小川 1986 など)。

参考文献 (アルファベット順)

- Keesing, R.M. 1975 *Kin Groups and Social Structure*, New York : Holt, Rinehart and Winston. [小川正恭・笠原政治・河合利光共訳 1982 『親族集団と社会構造』, 未来社]
- Lévi-Strauss, C. 1949 *Les Structures Élémentaires de la Parenté*, Paris : Press Universitaires de France. [馬淵東一・田島節夫監訳・花崎阜平・鍵屋明子・小川正恭ほか共訳 1981 『親族の基本構造』上巻, 1982 同下巻, 番町書房]
- 村武精一編 [小川正恭ほか共訳 1981 『家族と親族』, 未来社]
- 武蔵大学人文学部十年のあゆみ編輯委員会編 1980 『十年のあゆみ』, 武蔵大学人文学部
- 中根千枝・松園万亀雄・小川正恭 1986 「社会人類学」, 日本民族学会編『日本の民族学-1964~1983-』, 弘文堂, 20~42 頁
- 小川正恭 1964 「母系パンツ族における家族構造の類型」, 『東京都立大学社会人類学研究会報』第 3 輯 (1964 年度) 34~37 頁
- 1965 「親族理論の一考察—E.R.Leach をめぐって—」, 『東京都立大学社会人類学研究会報』第 4 輯 (1965 年度) 23~27 頁
- 1967a 「書評 :Robin Fox : Kinship and Marriage」, 『東京都立大学社会人類学研究会報』第 5 輯 (1967 年度) 33~44 頁
- 1967b 「書評 :H.W.Scheffler : Ancestor Worship in Anthropology」, 『社』第 1 巻 3・

- 4号, 14~19頁
- 1971a 「Nodal Kindred について—セイロンの事例をめぐって—」, 『東京都立大学社会人類学研究会報』第7輯 (1971年度) 1~17頁
- 1971b 「Kindred の類型」, 『社』4巻1・2号, 31~38頁
- 1972a 「ラブウォール族の双生児祭祀その他」, 『東京都立大学社会人類学研究会報』第8輯 (1972年度) 49~61頁
- 1972b 「論評: Rodney Needham (ed.): Rethinking Kinship and Marriage」, 『社』第5巻3・4号, 55~64頁
- 1972c 「北ローデシアのウォッチタワー運動」, 古野清人教授古稀記念会編『現代諸民族の宗教と文化—社会人類学的研究—』, 社会思想社, 45~62頁
- 1974 「親族研究メモ」, 『東京都立大学社会人類学研究会報』第9輯 (1974年度) 9~10頁
- 1975 「母方親族の優越的地位—イリグエ族とバングロ族の事例—」, 『社会人類学年報』第1巻, 36~58頁
- 1986 「覚書—フィジー諸島の社会組織の若干の側面について—」, 馬淵東一先生古稀記念論文集編輯委員会編『社会人類学の諸問題』, 第一書房, 27~30頁
- 1990 「夢とシャーマニズム—ツォウ族の事例から—」『武蔵大学人文学会雑誌』21巻3・4号, 79~91頁
- 1995 「ツォウ族の伝統家屋の空間構成」『武蔵大学人文学会雑誌』24巻1号, 41~61頁
- 1998 「村武先生に習ったこと」, 大胡欽一・加治明・佐々木宏幹・比嘉政夫・宮本勝編『村武精—教授古稀記念論文集・社会と象徴—人類学的アプローチ—』, 岩田書院, 558~559頁
- 2008 「親族研究の消滅はあったのか—日本の教科書の記述から—」『武蔵社会学論集・ソシオロジスト』10号, 51~72頁
- 2009 「書評: 北村嘉恵著『日本植民地下の台湾先住民教育史』」『台湾原住民研究』13号, 197~199頁
- 2012 「親族論の後退と復活—日本の事情—」, 河合利光編『家族と生命継承—文化人類学研究的の現在—』, 時潮社, 45~69頁
- 2020 「私のふるさと—東京都中野区野方町2—」『郷土ちがさき』148・149号, 8~10頁
- 小川正恭・渡邊欣雄・小松和彦編 1988 『社会人類学の可能性 (2) 象徴と権力』, 弘文堂
- 小川正恭・黄智慧・松岡格 2012 「台湾原住民族と八・八水害 (続)」『台湾原住民研究』16号, 69~122頁

Rivers, W.H.R. 1968 *Kinship and Social Organization*, London : The Athlone Press. [小川正恭訳 1978『親族と社会組織』(人類学ゼミナール 7 卷), 弘文堂]。

Service, E.R. 1971 *Cultural Evolutionism : Theory in Practice*, New York : Holt, Rinehart and Winston, Inc. [松園万亀雄・小川正恭共訳 1977『文化進化論—理論と応用—』, 社会思想社]